

『調査報告』

本匠村猿谷の石風呂さるや いしぶろ

矢野 徳 弥

(会員 本匠村宇津々)

川野 初 夫

(非会員 本匠村上津川)

大分県下には昔から石風呂がいくつか残されている。

その中で保存状態のよい山香町長田の石風呂、緒方町尾崎の石風呂は国重要有形民俗文化財に、また同町の辻河原石風呂、市穴石風呂、中ノ原石風呂、臼杵市塩石の石風呂は県有形民俗文化財の指定を受けている。

これらの石風呂は、昔の人がいずれも薬療法を目的としていたもので、所によりその施設の構造や利用の仕方に多少の差異はあるものの、そのほとんどは湯気で蒸浴する、いわゆるサウナ型の石風呂である。

これに対し本匠村に残る二つの石風呂は、いずれも加

温された薬湯にじかに浸る、いわゆる浴槽型のもので、蒸気を閉じ込めるための石室は必要でなく、構造は比較的簡単である。県下にはこのような形の史跡で、今までに指定を受けたものはなく、比較的数量の少ない貴重な遺跡ということが出来る。

その一つは山部地区松葉の石風呂で、集落から1¹きざばかり離れた腰越川の左岸にその跡が残るが、谷川の荒廃により今は水没して原型を失っている。この石風呂がいつ頃作られたものか、分かっていない。ただ、遠く祖母の代以前から引き続き昭和十年頃まで使われていたといい、かなり古くからのものと見ることが出来る。

いまひとつは、上津川地区猿谷の石風呂で、石を焼いていた跡は流失しているが、水槽は昔ながらの形を完全に残し、周辺の環境もよく保全されている。また、利用していたという人も何人か生存している。

このレポートは、本匠村に残る二つの石風呂のうちとくに猿谷の石風呂についてその保存を図るための参考として急ぎ作成したものである。

一、位置

猿谷の石風呂は、本匠村の西南部、直川村に接する上津川字猿谷にある。この場所を訪ねることはあまり難しくくない。番匠川沿いに県道三重・弥生線を西に進み、虫月の交差点を左折して県道堂ノ間・柿木線に入り二ッばかり行くと、上上津川（しもこうずがわ）というバスの

終点がある。遺跡はその川向かいの奥まった所にあるので、ここを過ぎて一〇ッばかり進み、左に入って小さな橋を渡り、少し下流方向に走ると谷川に出る。この谷川に沿って進むと道の左側に杉の木立があり、その手前から階段を降りるとすぐ目的の石風呂に行き当たる。

ここまではバスの終点からおおよそ五〇



石風呂所在地
伊賀郡本匠村大字上津川字猿谷

、道は平坦で舗装されている。

二、遺跡の概況

遺跡のある谷はさるや川といい、道路から約四ッ下にある。しかし、この場所だけは道路側から大きな岩があり、幅は一〇ッばかりあって、水の流れはゆるやかである。しかし、この場所だけは道路側から大きな岩が、谷の中程までせり出している。先端は山の形をして高さは二ッばかりあり、そこから横に高さ七・八〇坪の石の壁が延びて上流側を締め切っている。このため流れは大きく左側に回り、よほどの増水でないこの壁は越えられぬ形になっている。そして、その壁に守られるかのように前側に深く大きいくぼみができていて、それが自然の水槽となっている。この手前の縁はなだらかであまり厚くなく、容易に跨ぐことができる。水槽の下側は広い河原になっていて、現在は縁から一ッほど下がっているが、昔は河床が高く、人の出入りや、焼石の出し入れに至極便利であったという。また石風呂に通ずる道は、現在の村道ができるまでは谷の向こう側にあり、現在もその跡が残っている。

三、石風呂の現況

前記のくぼみをさらに詳しく調べてみると、このくぼみは舟の形をしており縦約二九〇センチ、幅は両端で約四〇センチ、胴体部分で八〇〜九〇センチ、深さは平均して四五〜五五センチあり、底の大部分は平たく、全体的にきちんとした造形をなしている。

このことから、自然がすべてこのような形のものを作りだしたとは考えられず、かなり多くの人手が加えられていると、見る事ができる。

石風呂は本来薬治を目的とするものであるから、薬効の主体と考えられる植物のセキショウが現場周辺でふんだんに入手できる必要がある。昭和の初め頃まではこの付近一帯の山は自然林に覆われ、長い年月環境条



件に大きな変化がなく、この谷川の至る所にセキショウの自生した群落が見られたが、戦後杉の造林が進むにつれて表土の流出がひどくなり、それに伴い谷底が荒れ、セキショウの群落も見られなくなったという。

この場所に石風呂が設けられたのは、セキショウの群落に覆われた谷川の中に、すこし手を加えればよい格好の水たまりが見つかったから…ということであろう。

このくぼみには、日ごろ雨水などが溜まって水槽となっているが、谷水は桶を用いなければ自然には入らない。またいくら洪水に出会っても土砂の流入しないことが不思議である。

四、供用年代と弘法大師の石像
この石風呂がいつ頃作られたものか、これを明らかにする記録は何も残されていない。

ただ、大同三年、隣の井ノ内地区にある長楽庵に、仏像を彫刻寄進するため、板が尾峠(直

川村横川との境界にある)を越えてこの地を訪れた弘法大師が、この石風呂に浸って長い旅の疲れを癒された：という伝説もあり、子供のころ祖母に連れられてこの石風呂に入っていたと言う人が、祖母も同様の話をしていたと言うので、少なくとも明治以前から使用されていたことに、間違いは無さそうである。

この石風呂の右側の崖の上に、高さ七〇^セ、幅四〇^セ、奥行き三五^セの石の祠があり、中に弘法大師の座像がまつられている。このため村の人達はこの石風呂のことを、古くから「お大師風呂」と呼び、大切に保存している。

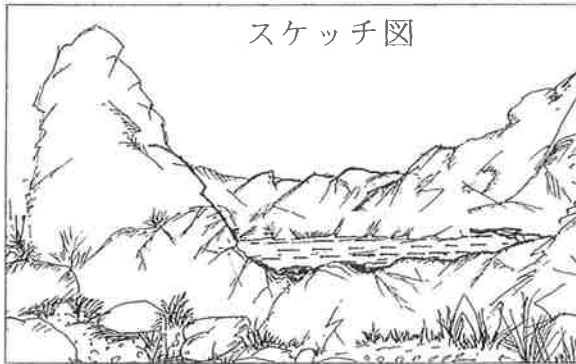
この祠の右側に「大正七年旧七月二十日□□」の文字が刻まれており、そのとき奉納されたものと思われるが、このとき初めてのものか、あるいは洪水に流された後再び奉納したものかは明らかでない。石風呂はその以前から使われていたというから、作られた時期とは関係が無さそうである。

なお、このお大師様は、近くに住む村上タケ子さんという人が、花や供物を絶やすことなく今も祀り続けている。

この石風呂が使用されなくなったのは戦後(一九四五年以後)のことです、それまでは日常的によく利用されていたと言う。

この地区に住む川野きく代さん(七八歳)の話によると、昭和二年(一九三七年)に、嫁入りして来たが、その後出産した長男が草にかぶれ(湿疹)、その治療のため何度も連れて行った記憶があり、そのころはもっぱら女の人が夕方になると子供に薪を背負わせ、この石風呂に通っていた：と言う。

スケッチ図



五、石風呂の利用方法

前出の川野きく代さんを初め、この石風呂を利用した体験があるという人の話によると、その仕方は次のようであった。

(一) 利用の期間

野外であるため冬の期間は使われず、寒くない初夏から晩秋までの間に多く利用された。

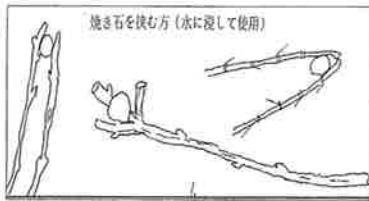
(二) 利用者の範囲

この石風呂を利用していたのは、もっぱら中上津川・下上津川・猿谷など近隣三〇〜四〇戸ばかりの人達であった。また、年齢に関係なく女性が主体で、子供を同伴することもあったが、一般に成人男子の利用は少なかった。

(三) 利用の準備

① 近くのセキシヨウを刈り取り、浴槽の底に一〇センチ以上の厚さに敷く。毎回かなりの量が必要とする。

② その後、桶を使って谷川の水を入れる。最初から満水にはせず、調節の余地を残してお



く。

③ 一方で加温のための石を焼く。大きさは直径五・六センチ、ミカンの大きさぐらいの石を数十個拾い集め、あらかじめ用意した薪を燃やして石を焼く。

④ 石が焼けたら、次々にこれを浴槽に投入する。石は火傷を起こす危険があるので、三つ又になった木の棒の先端に載せたり、真ん中で折った竹に挟むなどして移していた。このため石を焼く場所はできるだけ水槽に近く、かつ高低差の少ないことが求められ、ここまでは現在の石段を降りた場所が使われていた。

(四) 入浴

水槽に焼け石を投入すると、すさまじい蒸気とともに、セキシヨウの強い香りが辺りに漂い、やがて水槽の水は温湯に変わって行く。この温湯には石に付着した煤や灰が混じり、薬効があると信じなければ入浴には少し抵抗のあるものであった。温度はぬるめに設定し、ゆつたりと長めの入浴を繰り返しながら保養した。また、人によっては、熱心に「南無大師遍照金剛」を唱え続ける人もいて、大師信仰と石風呂の繋がりを強く感じたという。

(次頁下段に続く)